

電車内における迷惑行為と恥意識

日向野 智 子*¹・金山 富貴子*²・大井 晴 策*³

Annoying Behavior in a Train and Embarrassment

HYUGANO Tomoko, KANAYAMA Fukiko and OHI Seisaku

Abstract

The purpose of this study was to examine whether college students had done an annoying behavior in a train. We investigated to 198 college students, and asked the degree that to make an 17 annoying behavior in a train, and examined a reason to make or a reason not to make an annoying behavior. Result of analysis revealed that most people did not to “makeup”, “call with the cell-phone”, “sit on the floor” and “flirt by a couple” in a train. The reason was annoying and was a manner, unpleasantness, embarrassment. They did so the behavior in some cases about “eat food”, “talk aloud”, “handed over a seat to an elderly person”. In any case it seemed to be thought that these behavior were annoying. However, an opinion was divided whether they “keep on having worn a bag”. Therefore, as for such behavior, it is thought that a judgment a annoying behavior was divided by a person.

[Keywords] annoying behavior, in a train, embarrassment, manner, college students

問 題

電車という公共の場においては、社会的規範意識によってその場にふさわしい行動が求められ、いわゆる迷惑行為や逸脱行為は抑制されるものであると、従来考えられてきた。しかし、ここ10数年ほどの間に、電車の中で「化粧をする」、「飲食をする」、「携帯電話を使用する」、「床に座る」といった行為をする者が急速に増加しているようであり、そのような行為を電車内で日常的に目にするのが、以前より多くなったといわれている。

1999年に日本広告公共機構が製作したCMでは、電車内で化粧に励む「メイク虫」や、荷物で座席を占拠する「バショトリ虫」などが、電車内での迷惑行為として取り上げられ話題になった。これらをまとめた“ジコ虫”は、同年の日本新語・流行語大賞にてトップ10にランクインしている。化粧については、2001年2月に、地下鉄、東京メトロがマナーポスターで車内化粧を取り上げている。日本経済新聞（2008年6月11日付夕刊）にも、「なぜ平気？車内化粧」と題して、次のような記事が掲載されていた。2007年8月にポーラ文化研究所が首都圏の女性1500人を対象に行った調査によると、電車内で「メイク」経験のある者は全体の19%、20代後半での経験者は43%、反対に40代以上の経験者は10%以下であり、世代間で大きな差が見られたという。また、近年では、背中に背負うリュックでも、乗車時には胸元に抱えて持つように求めるポスターが電車内に掲示されている。このような動きからも、電車内におけるこれらの行為が、社会的にも問題になっていることがうかがえる。

そもそも、迷惑行為とはどのような行為を指すのであろうか。吉田・安藤・元吉・藤田・廣岡・齊藤・森・石田・北折（1999）は、迷惑行為を「行為者が自己の欲求充足を第一に考えることによって、結果として他者に不快な感情を生起させること、またはその行為」と定義している。しかし、同じ行為であっても、その行為によって不利益や不快な感情を生起させられるか、つまり、迷惑だと判断するかどうかは、人によって異なる。吉田・齊藤・北折（2009）は、個

* 1 立正大学心理学部特任講師

* 2 立正大学心理学部助教

* 3 立正大学心理学部特任教授

人的な不利益や不快を超えて迷惑だと正当に認知し主張しうるには、社会的影響性の認知と社会的合意性の認知のいずれかの視点が必要であると述べている。社会的影響の認知とは、自分以外の他者や社会全体に対して、どのような影響を持つのかという認知である。したがって、不利益や不快な感情を被るのは、その行為の直接の被害者である場合もあれば、その行為を観察した観察者である場合もある。一方、社会的合意性の認知とは、自分以外の他者も同じように考えているのかという認知である。これには、社会では何が迷惑と考えられているのかという一般他者の意見（世論）を含んでおり、その認知が重要な参照点になるという（池田・村田, 1991）。

吉田他（1999）は、さまざまな迷惑行為を収集した結果、人々が迷惑だと感じる行為は、ゴミのポイ捨てや駐輪違反のような「ルール・マナー違反」と、悪気はないが周囲の人への配慮を欠いた「周りの人との調和を乱す行為」とに大別されることを見出している。また、北折（2006）は、電車内における迷惑行為を複数挙げ、「悪質」、「空気が読めない」、「見苦しい」、「迷惑」、「無神経」のそれぞれをどの程度感じるか、5件法で回答を求めている。その結果、「携帯電話での通話」、「大声での会話」、「電車内での飲食」行為については、迷惑で無神経であると判断されることが多く、「電車内での化粧」行為については、空気が読めない見苦しい行為であると判断されることが多いことを報告している。

では、このような迷惑行為はなぜ生じるのであろうか。迷惑行為は社会的に望ましくない行為として認知されているが、迷惑行為の抑制には、社会的規範が影響していることが指摘されている。Cialdini & Trost（1998）は、社会的規範を命令的規範と記述的規範とに分けている（北折, 2006）。命令的規範とは、多くの人がとるべき行動や、望ましい行動と評価するであろうとの、個人の知覚に基づく規範である。命令的規範に背く行為は社会的に不適切と評価される行為であるため、その行為は、タブー視されることになる。これに対して、記述的規範とは、多くの人が実際に取っている行動であるとの知覚に基づく。社会的学習理論が述べるように、身近な他者のとる行動を社会的行動における判断の拠り所にすることは多い（Bandura, Grusec, & Menlove, 1967）。しかし、実際には、その行動が正しいとは限らず、周囲のとっている行動が命令的規範に準拠しているとは限らない（Newcomb, Huba, & Bentler, 1983）。命令的規範と記述的規範の観点から電車内における迷惑行為を考えると、周囲の他者が電車内で化粧をしたり、大声で話していたりする姿を観察していれば、これらの行為が社会的に望ましいか否かに拘わらず、自らもその行為を行う可能性が高いと考えられる。

さらに、公共の場における迷惑行為が散見されるようになった背景として、日本の文化を支えてきた伝統的行動基準であった羞恥心の低下が指摘されている（菅原・永房・佐々木・藤沢・薊, 2006）。Benedict（1946 長谷川訳 2008）は、『菊と刀』の中で、欧米の「罪を基調とする文化」に対して、わが国を「恥を基調とする文化」であると述べている。この「恥」とは「他者の批判に対する反応で」、「人前で嘲笑され、拒否されるか、あるいは嘲笑されたと思ひ込むことによって恥を感じる」というものである。すなわち、恥の文化とは、他者からの批判を念頭に置くことによって、行動が律せられる社会であり、恥とは、他者の存在があって初めて生じる感情であるといえる。Ferguson（1999）によると、恥は誕生してすぐに見られる怒りや、悲しみなどの他の感情とは質的に異なり、社会的、自己再帰的、自己意識的、もしくは自己評価的であるという（薊, 2008）。つまり、恥は内省的な特徴を持ち、何らかの基準に基づいて自己を評価する働きがある（薊, 2008）。このなんらかの基準をもたらしものが、前述した社会的規範であり、さらには、「他者」の存在といえるであろう。

井上（1977）は、日本人の羞恥心を支える根源に、集団としての「セケン」という地域社会の持つ機能が存在していることを述べている。菅原他（2006）は、このようなセケンの持つ機能の低下が、社会的迷惑行為の生起に関連していることを指摘している。セケンとは、親密な「ミウチ」と無関係な「タニン」の中間的な位置にある人間関係である。そして、セケンはミウチのような甘えが通用せず、タニンよりよりも重要な関係にあり、失態による印象の損傷度はミウチに比べて大きく、失う利益の量もタニンに比べて多い。したがって、日本人はセケンの人々から排斥されないように、セケンに対して恥ずかしくないよう振舞うという独特の行動基準を発達させてきたという（菅原他, 2006）。この観点は、先述した Benedict（1946 長谷川訳 2008）における恥の文化に通じている。

このことは、従来、日本には社会的規範として「世間体」を気にするということがあり、それが逸脱行動を抑制する力として働いていたことを示唆している。しかし、一方では「旅の恥はかきすて」ということわざがあるように、見ず知らずの人ばかり（タニン）の旅先では、羽目を外しても平気であることができ、セケンの目を気にせず解放されるといようなことも見られる。また、現代社会においては、特に都会の場合、隣に誰が住んでいるかも分からない状況が

多くなり、地域社会が機能しなくなってきた。そのため、現代社会においては、セケンという中間的存在が機能しなくなり、ミウチかタニンという2つのとらえ方になってきているのではないだろうか。

わが国では、恥は迷惑行為を抑制する（菅原他，2006）ことが明らかになっている。すなわち、他者からの批判を念頭におくことによって、恥をかかないよう、また社会的規範を準拠するよう、行動が律せられる。しかしながら、他者が自己の行動に対して影響力を持ち、恥や羞恥心を感じないよう振舞うためには、他者の存在を意識しているだけではなく、自己にとって、その他者の存在が重要である、あるいは、他者の評価が重要であるという前提が不可欠であろう。前述した通り、ミウチとタニンとの間のセケンという視点が乏しいとすれば、ミウチ以外の他者の評価は、自己にとって重要なものにはなり得ず、影響力を持たないとも考えられる。

このように考えてみると、従来、セケンによって抑制されていた逸脱行為や迷惑行為が、現代社会では抑制されづらくなっているのかもしれない。そのため、セケンやタニンに該当する近隣での行為までも「旅の恥はかきすて」のような状態で、周りの目を気にしなくなっていることが、迷惑行為を行う要因になっているのではないかと考えられる。

しかしながら、大学生が電車内においてどのくらい迷惑行為を行っているのかについての検討はほとんどなされていない。迷惑行為が増加してきた社会的・心理的要因をさらに探ることは重要なことであるが、まずは、電車内における迷惑行為の実態そのものを把握することが必要であろう。そこで、本研究では、学生からみた電車内における迷惑行為を取り上げ、迷惑行為をしたことがあるかどうか、また迷惑行為をする理由としない理由としてどのようなものがあるのかについて検討し、大学生における迷惑行為の捉え方を検討することを目的とする。

方 法

1. 調査対象者

東京都内の私立大学生198名（男性87名、女性111名）を対象に質問紙調査を行った。回答者の年齢は、18～62歳（平均19.50歳、標準偏差4.59）であった。

2. 調査方法

2011年6月下旬に、東京都内の私立大学において大学の講義時間を利用して質問紙を配布する集団形式で行い、その場で回答を求め、回収した。所要時間は10分～15分程度であった。

3. 質問紙の構成

先行研究や新聞記事などを参考に、電車内で行うと迷惑であると考えられる行為を以下の17項目あげた。①メイクをする、②携帯電話で通話する、③優先席で電子機器（パソコン、携帯電話、音楽機器、ゲーム等）を使用する、④飲み物を飲む、⑤食べ物を食べる、⑥ベタッと床にじかに座る、⑦車内混雑時にリュックを背負ったりバッグを肩にかけたりしたままではいる、⑧自分の座席の横に荷物を置く、⑨ヘッドフォンやイヤフォンを大音量で聴く、⑩1人以上の座席を占有する、⑪人の方へ足を組んだり投げ出したりして座る、⑫大声で話したり笑ったりする、⑬乗降者がいてもドア付近で立ったままではいる、⑭座ろうとしている人がいるのに同行者の分まで席をとる、⑮高齢者・怪我人・障害者・妊婦などが目の前に立っていても席を譲らない、⑯カップルで人目をはばからず抱き合ったりする、⑰座席で眠りこんでしまい隣の人に寄りかかる。

それぞれの行為について、その行為を自分がふだん行っている程度を4件法（よくする：1点、ときどきする：2点、ほとんどしない：3点、まったくしない：4点）で尋ね、その理由について自由記述により回答を求めた。

結果

まず、電車内で行くと迷惑であると考えられる行為17項目のそれぞれについて、その行為を自分がふだん行っている程度を集計し、項目ごとに平均値および標準偏差を算出した(表0)。また、それぞれの質問に対して各自がどの程度行っているのかについての回答は、後述するカテゴリー分類後では、よくする、ときどきするという回答を「する」、ほとんどしない、まったくしないという回答を「しない」として、集計を行った。

さらに、17項目それぞれの自由記述回答について、KJ法を用いて分類した。この17項目のうち、自分がふだん行っている程度や自由記述の回答が偏っておらず、様々な複数の理由が得られた8項目(メイクをする、携帯電話で通話する、食べ物を食べる、リュックを背負ったり肩にかけたりしたままである、大声で話したり笑ったりする、高齢者が目の前に立っていても席を譲らない、人目をはばからず抱き合ったりする)について、以下に結果を述べる。なお、本研究では男女差を考慮せず検討を行った。しかしながら、「メイクをする」ということは一般的には女性の行為であるため、この質問のみ、男性と女性の識別ができるよう、結果を記載する。

表0 電車内の迷惑行為を自分がどの程度行っているかに関する基本統計

電車内の迷惑行為	Mean	SD	よくする		ときどきする		ほとんど しない		まったく しない		合計	
			n	(%)	n	(%)	n	(%)	n	(%)	n	(%)
1. メイクをする。	3.79	0.56	2	(1.0)	9	(4.5)	17	(8.6)	170	(85.9)	198	(100.0)
2. 携帯電話で通話する。	3.66	0.62	1	(0.5)	12	(6.1)	41	(20.7)	144	(72.7)	198	(100.0)
3. 優先席で電子機器(パソコン、携帯電話、音楽機器、ゲームなど)を使用する。	2.89	1.17	38	(19.2)	34	(17.2)	38	(19.2)	88	(44.4)	198	(100.0)
4. 飲み物を飲む。	2.51	0.95	31	(15.7)	69	(34.8)	65	(32.8)	33	(16.7)	198	(100.0)
5. 食べ物を食べる。	3.09	0.94	15	(7.6)	34	(17.3)	67	(34.0)	81	(41.1)	197	(100.0)
6. ベタッと床にじかに座る。	3.93	0.35	1	(0.5)	3	(1.5)	4	(2.0)	190	(96.0)	198	(100.0)
7. 車内混雑時に、リュックを背負ったりバッグを肩にかけたりしたままである。	2.41	1.18	63	(31.8)	41	(20.7)	44	(22.2)	50	(25.3)	198	(100.0)
8. 自分の座席の横に荷物を置く。	3.58	0.73	2	(1.0)	22	(11.1)	33	(16.7)	141	(71.2)	198	(100.0)
9. ヘッドフォンやイヤフォンを聴くとき大音量にする。	3.42	0.87	10	(5.1)	21	(10.6)	42	(21.2)	125	(63.1)	198	(100.0)
10. 一人分以上の座席を占有する。	3.80	0.53	1	(0.5)	9	(4.5)	19	(9.6)	169	(85.4)	198	(100.0)
11. 人の方へ足を組んだり投げ出したりして座る。	3.72	0.62	2	(1.0)	12	(6.1)	26	(13.1)	158	(79.8)	198	(100.0)
12. 大声で話したり笑ったりする。	3.08	0.80	4	(2.0)	44	(22.2)	83	(41.9)	67	(33.8)	198	(99.9)
13. 乗降者がいてもドア付近で立ったままである。	3.05	0.94	14	(7.1)	40	(20.2)	67	(33.8)	77	(38.9)	198	(100.0)
14. 座ろうとしている人がいるのに、同行者の分まで、席を取る。	3.72	0.67	5	(2.5)	9	(4.6)	23	(11.7)	160	(81.2)	197	(100.0)
15. 高齢者・怪我人・障害者・妊婦などが目の前に立っていても、席を譲らない。	3.27	0.84	7	(3.6)	28	(14.2)	66	(33.5)	96	(48.7)	197	(99.9)
16. カップルで人目をはばからず抱き合ったりする。	3.91	0.39	2	(1.0)	1	(0.5)	10	(5.1)	185	(93.4)	198	(100.0)
17. 座席で眠りこんでしまい、隣の人に寄りかかる。	3.08	0.92	10	(5.1)	46	(23.2)	60	(30.3)	82	(41.4)	198	(100.0)

注：質問番号の下線は、KJ法による分類結果を本文中に記した8つの質問であることを表す。

1. メイクをする

電車内でメイクをするかどうかについては、94.5%の者がしないと回答しており、すると答えている者は、5.5%と少数派であった（表0）。

メイクをしない理由（表1-1）として、回答者に男性が含まれているため、「不必要」が32.8%で最も多くなっている。その他の理由としては、「マナー」31.1%、「恥」14.8%、「不快」10.7%、「困難」7.4%、「迷惑」3.3%といった理由があげられた。

また、メイクをすると回答した者の理由（表1-2）としては、「状況」に関する理由（座れたとき、他に場所・時間がないとき）のみであった（100%）。

表1-1 「メイクをする」の“ほとんどしない”“まったくしない”の回答内容

カテゴリー		n	合計	(%)
不必要	する必要がない	16 ^{*2}	40	(32.8)
	メイクをしていない	20 ^{*2}		
	しようと思わない	1		
	興味がない	1		
	面倒くさい	2		
マナー	人前ですべきではない	4 ^{*1}	38	(31.1)
	いいと思わない	1		
	マナー違反	10 ^{*1}		
	自分のモラルに反する	1		
	家です	14 ^{*1}		
	してはいけないと言われているから	1		
	常識的に良くない	5		
	公共の場	2 ^{*1}		
恥	みっともない	5	18	(14.8)
	かっこわるい	2		
	恥ずかしい	4 ^{*3}		
	人目が気になる	3		
	見せたくない	3		
	人前でするのは抵抗がある	1		
不快	見苦しい	2	13	(10.7)
	だらしがない	1		
	下品	1		
	見ていて不快・嫌	8		
	美しくない	1		
困難	揺れて出来ない	8	9	(7.4)
	やり方がわからない	1		
迷惑	周囲に迷惑	4	4	(3.3)
総計			122	(100.0)

*1：各回答中に、男性1名（『マナー違反』のみ2名）が含まれる。したがって、合計38件（100%）中に、女性86.84%、男性13.16%の回答が含まれる。

*2：各回答中に、男性8名ずつが含まれる。したがって、合計40件（100%）中に、女性52.5%、男性47.5%の回答が含まれる。

*3：男性1名の回答が含まれる。したがって、合計18件（100%）中に、女性94.4%、男性5.6%の回答が含まれる。

表1-2 「メイクをする」の“よくする”“ときどきする”の回答内容

カテゴリー		n	合計	(%)
状況	座れた時にする	1	12	(100.0)
	他に場所・時間がない時	11 ^{*1}		
総計			12	(100.0)

*1：男性1名の回答が含まれる。したがって、合計12件（100%）中に、女性91.7%、男性8.3%の回答が含まれる。

2. 携帯電話で通話する

電車内において携帯電話で通話するかどうかについては、93.4%の者がしないと回答しており、すると回答した者は6.6%であった(表0)。

通話しない理由(表2-1)として、「迷惑」46.3%と「マナー」33.3%が多くあげられた。その他には、「通話抵抗」6.1%、「不快」4.8%、「不必要」4.8%、「メール使用」4.1%といった理由があげられている。また、ごく少数ではあるが、「自己防衛」という理由もあがった。

次に、使用すると回答した者の理由(表2-2)としては、積極的な使用ではない「やむをえない事情」41.9%や「受動的通話」32.3%をあげた者が多かった。これに対して、「利便性」19.4%、「安易」6.5%のように、自ら進んで利用している理由もあげられた。

表2-1 「携帯電話で通話する」の“ほとんどしない”“まったくしない”の回答内容

カテゴリー		n	合計	(%)
迷 惑	他人に迷惑	61	68	(46.3)
	うるさいから	7		
マナー	マナー・マナー違反	42	49	(33.3)
	常識だから	7		
	通話禁止だから	4		
	車内では控えるべき	2		
	ルール違反	2		
	モラル	2		
	降りてからすればいい	2		
	持っていて使用しない	1		
	故意にしない	1		
	かかってきたら折り返しする	4		
通話抵抗	静かな中では抵抗がある	1	9	(6.1)
	他人の目が気になる	2		
	他人に話を聞かれない	4		
	他人がいる中でしたくない	2		
不 快	不愉快だから	4	7	(4.8)
	自分がされたら嫌だから	3		
不必要	かかってこないから	3	7	(4.8)
	相手がいないから	1		
	通話自体しない	1		
	必要ない	2		
メール使用	メールで済む	3	6	(4.1)
	メールだけで電話はしない	3		
自己防衛	知らない人に怒られたくない	1	1	(0.7)
総 計			147	(100.0)

表2-2 「携帯電話で通話する」の“よくする”“ときどきする”の回答内容

カテゴリー		n	合計	(%)
やむをえない事情	相手が親の時だけ	1	13	(41.9)
	職務上やむをえないとき	1		
	バイト先からだとなない訳にいかない	1		
	当選連絡の時	1		
	急用の時	5		
	重要な電話の時	3		
	大事なことから	1		
	相手からかかってきた時	6		
受動的通話	今電車というために出る	1	10	(32.3)
	電車と言って切る	3		
	メールより話した方が分かりやすいから	4		
利便性	メールより楽だから	1	6	(19.4)
	携帯よりスカイプを利用	1		
	暇だから	1		
安 易	なんとなく	1	2	(6.5)
		1		
総 計			31	(100.0)

3. 食べ物を食べる

電車内で食べ物を食べるかどうかについては、食べない回答した者が75.1%、食べると回答した者が24.9%と食べないと回答した者が多かった（表0）。

食べない理由（表3-1）としては、「迷惑」44.3%、「マナー」19.6%、「習慣」19.6%、「恥」13.4%、「不快」2.1%、といった理由があげられている。

また、食べると回答した者については、「軽食限定」41.1%という理由が最も多かった（表3-2）。さらに、「生理的欲求」28.0%や「状況」24.3%も多くあげられ、「食事可の車内」2.8%、「受動的摂食」1.9%、「習慣」1.9%といった理由もみられた。なお、電車内で食べ物を食べない理由としての「習慣」と、食べる理由としての「習慣」とでは、内容が異なることがわかる（表3-1、表3-2）。

表3-1 「食べ物を食べる」の“ほとんどしない”“まったくしない”の回答内容

カテゴリー		n	合計	(%)
迷 惑	ニオイがする	20	43	(44.3)
	こぼしたら嫌	6		
	迷惑になる	8		
	不愉快に思う人がいる	1		
	車内を汚す	5		
	食べかすが出る	2		
	揺れる車内では危険	1		
マナー	マナーだから	10	19	(19.6)
	行儀が悪い	1		
	自分のモラル	1		
	良いことでない	1		
	人前や公共ですべきでない	2		
	飲食店でないから	1		
	飲食する場所でない	3		
習 慣	自宅で済ませる	3	19	(19.6)
	食べ物を持ち歩かない	6		
	必要ないから	5		
	車内で食べる理由がわからない	1		
	車内では食べない	3		
	お腹がすいても食べようと思わない	1		
	恥ずかしい	4		
恥	品がない	1	13	(13.4)
	みっともない	1		
	車内では食べにくい	2		
	周りの目が気になる	4		
	人に見せたくない	1		
不 快	そういう人を見ると自分が嫌悪感を感じるから	2	2	(2.1)
不衛生	手が汚いから	1	1	(1.0)
総 計			97	(100.0)

表3-2 「食べ物を食べる」の“よくする”“ときどきする”の回答内容

カテゴリー		n	合計	(%)
軽食限定	ガムやアメ程度	27	44	(41.1)
	小さい菓子程度	8		
	おにぎり	4		
	ニオイのきつくないもの	5		
生理的欲求	お腹がすいたとき	21	30	(28.0)
	食欲旺盛だから	1		
	自然の摂理	3		
	どうしても必要な時	1		
	体調が悪い時	3		
	余程の事がなければしない	1		
状 況	車内がすいている時	4	26	(24.3)
	止まっている時	2		
	食べる時間がない時	15		
	外で買って食べられなかった時	1		
	朝食がわりに	1		
	緊急時	1		
	始発電車に乗る時	1		
	時と場合による	1		
食事可の車内	新幹線の時	2	3	(2.8)
	長距離以外はしない	1		
受動的摂食	友人からもらう時	1	2	(1.9)
	便乗して食べる	1		
習 慣	理由はない	1	2	(1.9)
	なんとなく	1		
総 計			107	(100.0)

4. 床にじかに座る

床にじかに座るかどうかについては座らない98.0%、座る2.0%で座ると回答した者はきわめて少なく、ほとんどの者が座らないと回答している（表0）。

座らない理由（表4-1）として、「不衛生」38.2%の他に、「迷惑」16.8%、「マナー」15.5%、「不快」13.6%も比較的多くみられた。その他には、「非常識」9.1%、「恥」5.0%、「大人意識」1.8%、といった理由があげられた。

次に、床に座る理由（表4-2）をみてみると、「生理」42.9%、「状況」28.6%、「自己中心的」14.3%、「過去経験」14.3%があげられた。しかし、床に座ると回答した者は7名のみであるため、いずれの理由も3名以内の少数回答であった。

表4-1 「床にじかに座る」の“ほとんどしない”“まったくしない”の回答内容

カテゴリー		n	合計	(%)
不衛生	汚い	78	84	(38.2)
	不潔（不衛生）	5		
	生理的に無理	1		
迷惑	人の邪魔になる（迷惑になる）	34	37	(16.8)
	スペースをとってしまう	3		
マナー	常識	11	34	(15.5)
	マナー違反	14		
	座る場所でない	4		
	座れなければ立つ	1		
	座るために座席がある	1		
	公共の場にふさわしくない	1		
	当たり前のこと	1		
	家ではない	1		
	だらしがない	12		
不快	行儀が悪い	4	30	(13.6)
	はしたない	1		
	品がない	1		
	みっともない	3		
	美しくない	2		
	かっこう悪い	1		
	馬鹿丸出し	1		
	見苦しい	1		
	見た目に悪い	2		
	見ていて不愉快	1		
	そうすることはいや	1		
	あり得ない	6		
非常識	座る必要がない	2	20	(9.1)
	床には座りたくない・座らない	8		
	座る神経がわからない・座る意味がわからない	2		
	考えたこともない（発想がない）	2		
恥	恥だから	7	11	(5.0)
	人目が気になる（冷やかな目でみられる）	4		
大人意識	もう子どもではないから	1	4	(1.8)
	大人として	1		
	中学生のやること	1		
高校生でないので	1			
総計			220	(100.0)

表4-2 「床にじかに座る」の“よくする”“ときどきする”の回答内容

カテゴリー		n	合計	(%)
生理	酔いつぶれたとき	1	3	(42.9)
	どうしても具合が悪い時	1		
	楽な体勢のため	1		
状況	短時間なので	1	2	(28.6)
	よほど汚くなければ	1		
自己中心的	家だという感じで	1	1	(14.3)
過去経験	高校生のとき座ったことがある	1	1	(14.3)
総計			7	(100.0)

5. 車内混雑時にリュックを背負ったりバックを肩にかけたりしたままにいる

車内混雑時にリュックを背負ったりバックを肩にかけたりしたままにいるかどうかについては、かけたままにしている者(52.5%)と、かけたままにしない者(47.5%)とに2分されたが、かけたままにしていると回答した者の方がやや多かった(表0)。

かけたままにしている理由(表5-1)としては、「状況」が最も多くみられた(62.4%)。次いで多かった理由は「自己中心的」23.8%であり、少数ではあるが、「不衛生回避」5.0%や「接触回避」4.0%、「迷惑」3.0%、「行動制御」1.0%、「模倣」1.0%という理由もあげられた。

また、肩にかけたままにしない理由(表5-2)としては、78.6%の者が「迷惑」を理由としてあげた。この他、「自己中心的」8.6%、「状況」7.1%、「マナー」5.7%といった理由があがった。

表5-1 「リュックを背負ったりカバンを肩にかけりしたままにしている」の“よくする”“ときどきする”の回答内容

カテゴリー		n	合計	(%)
状況	網棚に届かない・荷物が重すぎた時	8	63	(62.4)
	混雑しているから・人が多いから・身動きがとれない	32		
	入ったままの格好になってしまう・	1		
	ついそのまま乗ってしまう・タイミングを外した時はそのまま	2		
	鞆がよそいきそうで不安・見える範囲にあると安心・忘れがち	12		
	肩にかける鞆だから	2		
	持ち直す余裕がない・忙しい時は	5		
	どうしようもない・網棚がいっぱい	1		
自己中心的	はずすのが面倒・下に置く・移動が面倒	11	24	(23.8)
	リュックを降ろさなくてもそれほど変らない	9		
	網の上に置くのが嫌	2		
	体勢が辛くなるから	1		
	盗られて困るものはないから	1		
不衛生回避	床に置くのが嫌・鞆を汚したくない・下に置く・踏まれる	5	5	(5.0)
接触回避	人と密着したくない・人と近くなりたくない	4	4	(4.0)
迷惑	他人に迷惑がかかるから・邪魔になる・足元に置くのも邪魔だと思う	3	3	(3.0)
模倣	大人もそうしているから	1	1	(1.0)
行動制御	手がふさがると身動きとれなくなるから	1	1	(1.0)
総計			101	(100.0)

表5-2 「リュックを背負ったりカバンを肩にかけりしたままにしている」の“ほとんどしない”“まったくしない”の回答内容

カテゴリー		n	合計	(%)
迷惑	邪魔・どう見たって邪魔になる・人の迷惑になる・場所をとる	28	55	(78.6)
	邪魔にならないよう手に持つ・床に置く・足の間に置く・前に掛ける・抱える	16		
	してもできるだけ邪魔にならないように	1		
	一人でも多く入るように・荷物が他人にあたるのが嫌	10		
自己中心的	踏まれたら困るものが入っている時以外しない	1	6	(8.6)
	中身盗られないように	5		
状況	荷物が重いから・荷物が多から	3	5	(7.1)
	人との隙間がない時はおろす	2		
マナー	マナー・常識的にしてはいけないから	4	4	(5.7)
総計			70	(100.0)

6. 大声で話したり笑ったりする

車内で大声で話したり笑ったりするかどうかについては、すると回答した者が24.2%、しないという者が75.7%であり、しないと回答した者の方が多かった(表0)。

すると回答した者の理由(表6-1)は、「没入」が100%であった。一方、しないと回答した者の理由(表6-2)は、「迷惑」35.0%が最も多く、「コントロール」16.8%、「状況」16.1%、「恥」12.4%についても比較的多くみられた。さらに、「習慣」9.5%、「マナー」5.8%、「不快」4.4%といった理由があげられた。

表6-1 「大声で話したり笑ったりする」の“よくする”“ときどきする”の回答内容

カテゴリー		n	合計	(%)
没入	その場に自分たちだけだと感じる	1	59	(100.0)
	周りが見えなくなってしまう	2		
	話が盛り上がりとしてしまう	8		
	意識していないとつい大声になる	4		
	友達といるとつい・盛り上がりしてしまう	31		
	内容が面白い・たのしかったら大声になる	8		
	テンションがあがってれば	4		
	ノリで	1		
総計			59	(100.0)

表6-2 「大声で話したり笑ったりする」の“ほとんどしない”“まったくしない”の回答内容

カテゴリー		n	合計	(%)
迷惑	周りに迷惑	43	48	(35.0)
	うるさい	5		
コントロール	大声の友人をたしなめる	2	23	(16.8)
	人と話すときは声のボリュームを下げる・小声	10		
	しないように気をつけている	5		
	気づけばやめる	2		
	周りがあった声の大きさで話す	3		
	話し相手に聴こえればいいと思う	1		
状況	友達と乗ることがほとんどない・基本的に1人で乗る	18	22	(16.1)
	1人ではしない	1		
	空席次第	1		
	よほどのことがない限り	2		
恥	周りの目を気にする	5	17	(12.4)
	恥ずかしい・みっともない	3		
	内容を聴かれたくない	8		
	周りの人に聴かれていると恥ずかしい	1		
習慣	電車内で大声で話すことがない・大声ではない	3	13	(9.5)
	大声で話す必要がない	2		
	静かな方が好きだから・普段の声が大きくない	8		
マナー	マナーだから・マナー違反	5	8	(5.8)
	公共の場にふさわしくない	3		
不快	自分が嫌な経験をしたことがある	1	6	(4.4)
	自分がされたら嫌だ	1		
	そういう人が嫌だから	1		
	見苦しい	3		
総計			137	(100.0)

7. 高齢者などが目の前に立っていても席を譲らない

高齢者などが目の前に立っていても席を譲らないということについては、譲らない（回答では『する』に該当）が17.8%、譲る（回答では『しない』に該当）が82.2%となっており、譲ると回答した者が多かった（表0）。

譲らないと回答した者の理由（表7-1）としては、「判断の困難」23.0%、「生理」23.0%、「自己防衛」16.4%、「勇気の欠如」13.1%、「相手の特徴」9.8%、「状況」8.2%、「自己中心的」6.6%といった理由があげられた。

次に、譲ると回答した者の理由（表7-2）をみると、7割以上（75.2%）の者が「マナー」を理由としてあげていた。また、「思いやり」15.2%、「罪悪感」7.6%「迷惑」1.9%、といった理由があげられている。

表7-1 「高齢者などが目の前に立っていても席を譲らない」の“よくする”“ときどきする”の回答内容

カテゴリー		n	合計	(%)
判断の困難	どこから高齢者に入るのかわからない	1	14	(23.0)
	譲っていいか微妙な年代の方	1		
	高齢者や妊婦の判断に迷う	2		
	どう譲っていいのかわからない	2		
	譲る基準がわからない	1		
	判断が難しい	6		
	席を譲った相手がショックを受けたり、高齢者だと思われたくない人だったりと考えると怖い	1		
生理	眠気や疲労などで譲らないときがある	9	14	(23.0)
	体調が悪い	1		
	疲れがすごいときは寝ていて気づかない	1		
	寝ていて後で気づく	3		
自己防衛	断られたときイラッとする	1	10	(16.4)
	断られたとき恥ずかしい	2		
	譲ったら怒られて・断られて以来行動できない	3		
	譲って断られるのが怖い	3		
	言えるときと言えないときがある	1		
勇気の欠如	譲る勇気が出ない・口に出せない・言いづらい	8	8	(13.1)
相手の特徴	相手の様子を見て考える	5	6	(9.8)
	当然と思っている人には譲らない	1		
状況	そういう行動をしづらい空気のあるときがある	2	5	(8.2)
	普通席だったらわからない・譲らないかもしれない	1		
	普通席だったらその人の度合いによって譲る	1		
	友達といるときは譲る	1		
自己中心	大学まで長い	1	4	(6.6)
	面倒くさい	1		
	1人だと寝たふりをしてしまう	1		
総計	優先席なら譲る	1	61	(100.0)

表7-2 「高齢者などが目の前に立っていても席を譲らない」の“ほとんどしない”“まったくしない”の回答内容

カテゴリー		n	合計	(%)
マナー	人として譲る・譲る	30	79	(75.2)
	席を譲るのは基本・当たり前	13		
	マナー・常識	20		
	高齢者などを大切にするのは義務	1		
	公共上の福祉は民法上の規定であるため	1		
	立っているのが当たり前	7		
	そういう方がいるときは座らない	3		
思いやり	若くて健康だから	4	16	(15.2)
	立っていると危ないことがある	2		
	自分はその立場だったら辛いから	2		
	その人の気持ちを考える	2		
	労わることを学んだから	2		
	思いやり	6		
	譲り合いの心は大切	1		
罪悪感	人は助けあわないといけない	1	8	(7.6)
	良心が痛む	4		
	罪悪感がある	2		
	席を譲らないと気が済まない	1		
迷惑	座ったままの自分の気持ちがよくない	1	2	(1.9)
	迷惑だから	2		
総計			105	(100.0)

8. 人目をはばからず抱き合ったりする

人目をはばからず抱き合ったりするかどうかについては、すると回答した者は1.5%であり、実数にして僅か3名に過ぎず、今回の調査では例外的な回答ともいえる結果であった。これに対して、しないと回答した者は98.5%であり、ほとんど者がこうした行為に対しては否定的であった(表0)。

しないと回答した者の理由(表8-1)としては、「相手不在」をあげた者が30.2%と比較的多くみられた。さらに、「恥」20.1%、「不快」16.2%、「マナー」15.1%、「否定」10.6%、「迷惑」7.8%という理由もあげられた。

すると回答した者の理由(表8-2)としては、「状況」、「受動的」、「積極的」、「模倣」という理由が1名(25%)ずつあげられた。

表8-1 「カップルで人目をはばからず抱き合ったりする」の“ほとんどしない”“まったくしない”の回答内容

カテゴリー		n	合計	(%)
相手不在	恋人・相手がいない	54	54	(30.2)
恥	人目を気にする	12	36	(20.1)
	恥ずかしい・恥知らず	24		
不快	気持ち悪い	8	29	(16.2)
	目ざわり	2		
	見苦しい	2		
	見ていて不快	10		
	イライラする	2		
	見ていて嫌	4		
	腹が立つ	1		
マナー	よくない	2	27	(15.1)
	非常識	7		
	マナー違反・マナー	7		
	公共の場	9		
	電車の中でしなくてもよい	2		
否定	そういう人間になりたくない	1	19	(10.6)
	あり得ない	2		
	しようと思わない	6		
	絶対にしない	5		
	ばかっぽい	2		
	頭がおかしい	2		
	ベタベタするのが好きではない	1		
迷惑	迷惑	14	14	(7.8)
総計			179	(100.0)

表8-2 「カップルで人目をはばからず抱き合ったりする」の“よくする”“ときどきする”の回答内容

カテゴリー		n	合計	(%)
状況	混んでいたらしょうがない	1	1	(25.0)
受動的	相手がしてくる	1	1	(25.0)
積極的	好きならする	1	1	(25.0)
模倣	アメリカじゃ普通	1	1	(25.0)
総計			4	(100.0)

考 察

1. メイクをする

電車内でメイクをするかどうかについては、ほとんどの者がしないと回答しており、すると答えた者はごくわずかであった。メイクをしないと回答した人数は、日本経済新聞（2008）に掲載された、ポーラ文化研究所の行った調査結果よりもやや少ないが、これは、調査対象者の中にまだメイクをしていない学生が多く含まれていたことにも起因すると考えられる。

メイクをしない理由は、「必要性なし」、「マナー」、「恥」、「不快」、「困難」、「迷惑」の順に多かった。これらの理由は、マナー、恥、困難といったメイクをする側の立場に立っての理由と、不快、迷惑といったメイクをされる側に立っての理由とに分けられる。また、メイクをしない理由における不快カテゴリーの中には、電車内でのメイクは見苦しいという北折（2008）の研究結果と一致する理由が得られた。

上述したメイクをしない理由のうち、メイクをする側の視点からみたマナーと恥、メイクをされる側の視点からみた不快と迷惑は、メイクは自宅で済ませるものであるという社会的規範を受け入れている人ほど、電車内でメイクをしている人を観察した際に、強く感じるであろう。このような意識や感情は、社会的規範を取り入れた自己の価値観でもある。そのため、メイクをすることに対する抵抗感が強く、今後も、電車内ではメイクをしないという態度が持続すると考えられる。しかし、メイクをする側に立っての理由である「困難」については、メイクをしたくても揺れて出来ないといったもので、これが解決されれば、メイクをする方向に変化する可能性があると考えられる。したがって、メイクをしない理由として困難をあげた場合、社会的規範の影響は低いのかもしれない。

また、メイクをすると回答した者の理由として、座れたとき、他に場所・時間がないときという「状況」があげられた。このことは、いたし方がない状況や、車内の状況が許せばメイクをするということであり、日常的に行っているわけではないと考えられる。

以上のように、今回の調査の結果においては、電車内でメイクをする者が少ないという結果になった。しかし、電車内でのメイク行為はしばしば目にする光景であることから、そのような行為を行っている者を対象として、電車内でなぜメイクをするのか、理由や動機を改めて検討することが必要であろう。

2. 携帯電話で通話する

電車内において携帯電話で通話するかどうかについても、ほとんどのものが通話しないと回答しており、通話すると回答した者は1割に満たなかった。

通話しない理由として、多くあげられたのは、「迷惑」と「マナー」であった。また、いずれも少数ではあるが、「通話抵抗」、「不快」、「不必要」、「メール使用」、「自己防衛」という理由もあがった。これらの理由のうち、迷惑と不快は、使用される側に立っての理由であると考えられる。すなわち、周りの人に通話されることによって感じた気持ちを内在化することにより、通話しないという気持ちを抱くようになったものと考えられる。しかし、通話をされたとしても迷惑や不快であると感じなかった場合は、自ら通話する可能性もあると考えられる。これに対して、マナー、不必要、通話抵抗、メール使用、自己防衛という理由は、使用する側に立っての理由と考えられる。このうち、マナー、通話抵抗、メール使用は、常識や人目を気にした理由であり、日常的に、自発的に通話を控えていることがうかがえる。したがって、今後も車内では通話しないという考えが持続していくと考えられる。しかし、不必要は通話したい用件があったり、他者から電話がかかってきたりすれば、通話に応じる可能性がある。また、自己防衛については、他者に叱られる可能性が低ければ、通話をするのかもしれない。そのため、不必要や自己防衛を理由としてあげた者は、現在は通話をしていなくても、通話する方向へ変化するとも考えられ、通話をしない理由としては強固なものとはいえないであろう。

次に、通話すると回答した者の理由としては、「やむをえない事情」や「受動的通話」をあげた者が多かった。これらの理由は、自ら積極的に通話をするということではないため、通話する場合も限定的なものと考えられる。これに対して、「利便性」、「安易」のように、自ら進んで利用している理由もあげられた。利便性、安易といった理由は、通話することへの積極的な理由であり、電車内でも気軽に通話をしているようである。そのため、今後も電車内での通話を続けていくと考えられる。

3. 食べ物を食べる

電車内で食べ物を食べるかどうかについては、食べない回答した者は全体の4分の3であり、残りの4分の1が食べると回答した。

食べない理由として最も多くあげられたものは「迷惑」であり、「マナー」、「習慣」、「恥」といった理由も比較的多かった。また、ごく少数ではあるが「不快」、「不衛生」もあげられた。これらの理由のうち、迷惑、恥、不快といった理由は、周りの人が食べている様子を見た際に、自分が迷惑や恥ずかしさ、不快感を感じたことにより、自分は食べないという気持ちを抱くようになったと考えられる。これに対して、マナーは常識に照らし合わせた行動基準であり、習慣と不衛生は、自分自身の行動基準に電車内で食べることが沿わないと考えられる。

また、電車内で食べる理由については、「軽食限定」をあげた者がもっとも多かった。しかし、軽食に含まれるものは、ガムや飴のような小さな菓子類から、おにぎりのように手軽な主食まで多岐にわたる。これらのうち何を食べているのかによって、食べている姿を見た際に受ける印象は異なるであろうが、いずれにせよ、電車内で食べるという行為が常態化していると考えられる。また、これらは「何なら食べるのか」を述べているだけであり、それらを食べる理由を述べているわけではない。したがって、今後は、どのようなものなら食べてもよいと思うのか、なぜそれを食べるのかを検討しなければならない。

さらに、電車内で食べる理由として、「生理的欲求」や「状況」も多く、「食事可の車内」、「受動的摂食」、「習慣」といった理由もみられた。このうち生理的欲求は我慢できなくなったときに食べるのであり、そういう状態になった時には電車内でも食べるが、そうでない時には食べないと考えられ、日常的に食べているわけではないと思われる。また、状況、食事可の車内、受動的摂食は、食べるという行為が限定的に生じているものと思われる。それに対し、習慣といった理由は、電車内で食べる行為が気軽に、しかも日常的に行われているものと考えられる。したがって、電車内で何かものを食べているという意識が薄く、食べることによって、周りの人がどのように思うか考えてはいないのであろう。

4. 床にじかに座る

床にじかに座るかどうかにについては、座るという回答はごくわずかであり、ほとんどの者が座らないと回答した。

座らない理由として「不衛生」という回答が3割を超えた。また、「迷惑」、「マナー」、「不快」も比較的多くみられた。その他には、「非常識」、「恥」、「大人意識」といった理由があげられた。

このうち、不衛生は個人の価値観に起因する理由であると考えられる上に、衛生というより現実的な観点をもつため、床にじかに座ることへの抵抗感がいっそう強いものと考えられる。また、マナー、非常識、恥、大人意識といった理由は、社会的規範の影響を受けて、自己の中に積極的に生じた理由であると考えられる。さらに、迷惑、不快といった理由は、周りの人がそうした行為を行った時に感じるような感覚であり、他者の視点を取り入れた理由であらう。

次に、床に座る理由をみても、「生理」、「状況」、「自己中心的」、「過去経験」があげられたが、床に座ると回答した者は7名のみであるため、床に座ること自体が、例外的な行為であると考えられる。

5. 車内混雑時にリュックを背負ったりバックを肩にかけたりしたままにいる

車内混雑時にリュックを背負ったりバックを肩にかけたりしたままにいるかどうかについては、かけたままにしている者の方が、かけたままにしない者よりもやや多かった。

かけたままにしている理由としては、最も多かったものは「状況」であり、次いで「自己中心的」も多くみられた。また、少数ではあるが、「不衛生回避」、「接触回避」、「迷惑」、「行動制御」、「模倣」という理由もあげられた。

このうち、状況が最も多い理由であるが、混雑時においては、身動きが取れなかったり、網棚に手が届かなかったりと、自分の意思とは別に肩にかけたままにしているような状況に置かれていることがうかがわれる。また、自己中心的、不衛生回避、接触回避は、自分の欲求を満たすために行う利己的・自己志向的な行動であると考えられる。これに対して、迷惑は周りの人への配慮に基づいた利他的・他者志向的な行動といえよう。また、模倣はわずか1人に見られるものであるが、「大人もそうしているから」という理由が述べられており、肩にかけたままという行動だけでなく、電車内における迷惑行動が生じる原因として、他者の行動の模倣があることを示唆するものと考えられる。しかし、一般的には大人の行動を模倣することは幼少期に見られることであるが、社会的規範に関するような行為は、大学生も大人を模倣対

象としてとらえていると考えられる。

また、肩にかけたままにしない理由としては、8割弱の者が「迷惑」を理由としてあげた。その他、「自己中心的」、「状況」、「マナー」といった理由があがった。

このうち、迷惑、マナーという理由によって肩にかけたままにしない行動は、他者の立場に立って、自発的、積極的に行っている行動といえ、混雑時でもそのような行動を常に行っていると考えられる。それに対して、自己中心的な理由は自分の都合を優先してはいるが、鞆をかけたままにはしないことによって、迷惑行為にはいたっていないことがうかがえる。また、状況については自分の意思に関係なく状況に応じて生じる行動であると考えられ、荷物が重かったり混雑していなかったりするなど、状況や条件が変われば、鞆をかけたままでも考えられる。

6. 大声で話したり笑ったりする

車内で大声で話したり笑ったりするかどうかについては、すると回答した者よりもしないと回答した者のほうが多く、全体の7割を超えた。

しないと回答した者の理由は、「迷惑」が最も多く、「コントロール」、「状況」、「恥」についても比較的多くみられた。さらに、「習慣」、「マナー」、「不快」といった理由があげられた。このうち迷惑、不快という理由は、周りの人の立場・視点に立ってのもので、他者の大声や笑い声に迷惑や不快を感じた経験に基づき、このような行為を慎むようになったと考えられる。それに対し、恥は、他者の視線を強く意識して生じる情緒的な理由と考えられる。また、マナー、コントロールは、社会的規範を遵守するよう自らの行動を律していると考えられる。しかし、状況という理由をあげた者には、車内の状況や同席者によっては、大声で話したり、笑ったりする方向へ変化する可能性があると考えられる。

すると回答した者の理由は、「没入」が100%であった。内容の違いはあるが、車内で大声で話したり、笑ったりするのは、自分の置かれた状況に没入した結果であることがわかる。中でも、「友達といるとつい盛り上がりってしまう」「話に盛り上がる」という理由が多く、話に夢中になると、車内にいることを忘れ大声になったり笑ったりすることがうかがえる。

7. 高齢者などが目の前に立っていても席を譲らない

高齢者などが目の前に立っていても席を譲らないということについては、譲る（回答では『しない』に該当）という回答が8割を超え、譲らないよりも譲ると回答した者のほうが多かった。

譲ると回答した者の理由をみると、7割以上の者が「マナー」を理由としてあげていた。また、「思いやり」、「罪悪感」、「迷惑」といった理由があげられている。このうち、マナーは確固たる意思に基づいた理由といえ、譲る行為が日常的に行われているものと考えられる。また、思いやり、罪悪感は、いずれも対人的状況で生じる感情に基づくものであるが、思いやりは相手のために思い行う利他的・愛他的行動であるのに対し、罪悪感是自己の後ろめたさを軽減するための利己的行動であると考えられる。とはいえ、罪悪感や羞恥は違反行為を抑制し、社会的行動を促進する（有光, 2002）ことが明らかになっており、この理由に基づく譲り合いが、愛他的行動に比べて劣ったり、悪かったりということではない。

次に、譲らないと回答した者の理由としては、「判断の困難」、「生理」、「自己防衛」、「勇気の欠如」、「相手の特徴」、「状況」、「自己中心的」といった理由があげられた。

このうち、自己防衛、勇気の欠如、判断の困難、相手の特徴については、譲る気持ちはあるが、不確かな状況で譲っても断られたら嫌だという気持ちが働き、譲ることを躊躇してしまうことがうかがえる。状況についても同じような気持ちが働くが、状況次第では譲る方向へ変わる可能性があると考えられる。しかし、生理的な理由については、見方を変えると、譲らないことを正当化しているとも受け取れる。さらに、自己中心的な理由によって譲らない場合、譲るということを念頭に置かない行動といえ、最も譲る行為とは対極的なところに位置しているといえるであろう。

8. 人目をはばからず抱き合ったりする

人目をはばからず抱き合ったりするかどうかについては、しないと回答した者が全体の多くを占め、ほとんど者のがこうした行為に対しては否定的であることが明らかになった。すると回答した者はほとんどなく、今回の調査では例外

的な回答ともいえる。

まず、しないと回答した者の理由としては、「相手不在」をあげた者が3割と比較的多くみられた。さらに、「恥」、「不快」、「マナー」、「否定」、「迷惑」という理由もあげられた。

このうち、恥は他者の視点に立って自分を眺める公的自己意識が強く働いていると考えられる。また、迷惑や不快は、カップルの抱擁を目の当たりにしなければならない周りの人の視点に立っており、第三者としての経験に基づいた理由であろう。マナーや否定については、いずれも確固たる考えに基づいたものであるが、マナーは一般常識に照らし合わせた理由であるのに対し、否定は自己の価値感に照らし合わせた理由であり、自己の価値観とはかけ離れた行為であるため、否定的な見方がより強く表れていると考えられる。

さらに、人目をはばからず抱き合ったりしない理由として相手がいないということがあげられているが、抱き合ったりしない理由の比率としては、最も多かったものである。相手、すなわち恋人がいないために、自分の置かれている環境そのものがそうした行為と無関係な状況であるため、必然的に、抱き合うようなことはないと回答せざるを得なかったものと考えられる。したがって、恋人が出来たときにこの回答が変わらないかどうかは、現時点では不明である。

次に、すると回答した者の理由をみると、「状況」、「受動的」、「積極的」、「模倣」（各1名）という理由があげられた。混んでいたらしょうがないという状況、相手がしてくるという受動的といった理由は、自ら積極的に行っている行為ではないと述べているようにも受けとれるが、やむを得ず行っているようで、選択的にそのような行為を受容しているとも考えられる。一方、積極的（好きならする）、模倣（アメリカでは普通）という理由をあげた者は、自ら進んでそのような行為を行っているといえるであろう。

いずれにせよ、電車内で人目をはばからず抱き合うような行為は、大学生にとっては例外的な行為であり、多くの学生がそのような行為は慎むべきであると考えていることが示された。

総合考察

本研究の目的は、電車内における迷惑行為について、迷惑行為をするかしないか、またそれぞれの理由を探り、大学生における迷惑行為の捉え方を検討することであった。

分析の結果、電車内で「メイクをする」、「携帯電話で通話する」、「床にじかに座る」、「人目をはばからず抱き合ったりする」という行為については、9割以上の学生がそのような行為をしないと回答していた。したがって、これらの行為は、多くの学生が「迷惑な行為」として認識していると考えられる。また、「食べ物を食べる」、「大声で話したり笑ったりする」、「高齢者などが目の前に立っていても席を譲らない」といった行為についても、7割以上の学生がしないと回答をしていることから、迷惑行為であるといえるであろう。携帯電話での通話、食べ物を食べる、大声で話す行為をしない理由については、いずれも迷惑が最も多くあげられた。これは、検討手順は異なるが、北折（2008）と一致する結果である。ところが「混雑時に鞆やリュックを肩にかけたままにする」行為については、するという回答としないという回答に2分された。このような行為は、個人によって迷惑行為か否かの判断がわかるものと考えられる。

上述した8つの迷惑行為を行うまたは行わない理由に共通してみられることは、迷惑行為をされる側である他者の視点に立って行動を考えるか、それとも、迷惑行為をする側である自己の視点に立って行動を考えるかということである。このような両者の視点には、社会一般で広く受け入れられている常識や社会的規範という観念が影響を及ぼしているといえるであろう。すなわち、自己の視点に立つにせよ、他者の視点に立つにせよ、自らが体験した行為やこれから行おうとしている行為を、世間一般に広く受け入れられている常識や社会的規範のような価値判断に照らし合わせた際に、合致するのか、それとも逸脱するのかによって、その行為の可否を判断すると考えられる。

このように、社会的行動が生じる際には、他者の視点を取り入れることの重要性が古くから指摘されてきた（Meed, 1937）。すなわち、他者からみた自己の姿を想像することにより、その場にふさわしい振る舞いが獲得されるということである。このような他者の視点を獲得することは、まるで他者を眺めるかのように、自分自身を客観的にみつめる公的自己意識（Festinger 1954）を育てることもつながる。先に述べた、迷惑行為をされる側である他者の視点に立つことは、公的自己意識特性の強さにも関連するのかもしれない。これに対して、迷惑行為をする側である自己の視点立つことは、自分自身の感情や内面に注意が向きやすい私的自己意識特性（Festinger, 1954）に関連するとも考えられる。

また、迷惑行為をしない理由とする理由についてはさまざまなものがあげられたが、他者に迷惑をかけないよう振舞

うということは、社会的規範の準拠や他者のためを思った、純粋な他者志向的・利他的行動によって生じるだけではなく、社会の価値基準にしたがわなければ、自分自身がマイナスの評価を受けるということを危惧した、自己志向的・利他的行動によっても生じることが明らかになった。

前述した通り、井上（1977）は、日本人の羞恥心を支える集団としての「セケン」という地域社会の機能が失われてきたことを指摘している。しかしながら、本研究の結果では、「セケン」よりは広い「見知らぬ他者」すなわち「タニン」であったとしても、他者の存在が迷惑行為の抑止にかかわることを示唆しているのではないであろうか。

ある行為を迷惑行為であると認知するか否かは、自分以外の他者や社会に対してどのような影響を持つのか（社会的影響の認知）、また、自分以外の他者も同じように考えるのか（社会的合意性の認知）という基準に照らし合わせて判断される（吉田他, 2009）。ここでいう他者とは、身近な他者だけではなく、一般的な他者であるタニンや、それよりも狭いセケンも含まれるであろう。井上（1977）や菅原他（2006）の見解では、セケンとしての社会機能が低下したために迷惑行為を抑止する力が乏しくなっていると考えられてきた。しかし、本研究の結果を鑑みると、セケンよりも遠いタニンの目であっても、一般社会の視点に照らし合わせた自己評価が促進されると考えられる。したがって、タニンが持つであろう社会的規範に逸脱することは、他者からの非難を想起させ、恥の意識を覚えるとも考えられるであろう。すなわち、セケンという見方が乏しくなったと考えられる現代社会や現代青年において、逸脱行為や迷惑行為を抑止する他者の目は必ずしも衰えているとはいえず、電車内という一時的な公共物に乗り合わせただけのタニンであっても、社会的逸脱行為・社会的迷惑行為の抑止力としての「他者の目」という機能は、少なからず備えていると考えられる。

引用文献

- 有光興記（2002）. 罪悪感, 羞恥心と問題行動の関係 日本心理学会第66回大会発表論文集, 891.
- 薊理津子（2008）. 恥と罪悪感の研究の動向 感情心理学研究, **16**(1), 49-64.
- Bandura, A., Grusec, J. E., & Menlove, F. (1967). Vicarious extinction of avoidance behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **5**, 16-23.
- Benedict, R. F. (1946). *The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture*. Houghton Mifflin. (ルース, F. ベネディクト 長谷川松治 (訳) (2008). 菊と刀—日本文化の型 (上・下) 講談社学術文庫)
- Cialdini, R. B., & Trost, M. R. (1998). Social Influence: Social Norms, Conformity, and Compliance. In D. T. Gilbert, S. T. Fiske, & G. Lindzey (Eds.), *The handbook of social psychology*. Vol.2 (4th ed.), New York: McGraw-Hill. Pp.151~192.
- Ferguson, T. J. (1999). Guild. In D. Leinson, J. J. Pomzetti, Jr., & P. F. Jorgensen (Eds.), *Encyclopedia of human emotion*. vol.1 New York: Macmillan Reference USA. Pp.307-315.
- Festinger, L. (1954). A theory of social comparison process. *Human Relations*, **7**, 117-140.
- 池田謙一・村田光二（1991）. ころと社会：認知社会心理学への招待 東京大学出版会
- 井上忠司（1977）. 「世間体」の構造—社会心理史への試み— 日本放送出版局
- 北折充隆（2008）. 電車内の迷惑行為評価に関する検討—悪質行為はKYか？— 金城学院大学大学論集, 人文科学編, **5**(1), 16-26.
- Mead, G. H. (1934). *Mind, Self, and Society*. Chicago: University of Chicago Press. 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収 (訳) 1973 精神・自我・社会 青木書店
- Newcomb, M. D., Huba, G. J., & Bentler, P. M. (1983). Mother's influence on the drug use of their children: conformity tests of direct modeling and mediational theories. *Developmental Psychology*, **19**, 714-726.
- 日本経済新聞社（2008）. 「なぜ平気？車内化粧」 日本経済新聞2008年6月11日付夕刊
- 菅原健介（1998）. 人はなぜ恥ずかしがるのか—羞恥と自己イメージの社会心理学— サイエンス社
- 菅原健介・永房典之・佐々木淳・藤沢文・薊理津子（2006）. 青少年の迷惑行為と羞恥心—公共場面における5つの行動基準との関連性— 聖心女子大学大学院論叢, **107**, 57-77.
- 吉田俊和・安藤直樹・元吉忠弘・藤田達雄・廣岡秀一・斉藤和志・森久美子・石田靖彦・北折充隆（1999）. 社会的迷惑に関する研究（1）名古屋大学教育学部紀要（心理学）, **46**, 53-73.
- 吉田俊和・斎藤和志・北折充隆（編）（2009）. 社会的迷惑の心理学 ナカニシヤ出版